

第32回防衛問題セミナー議事録

1 日 時：平成27年10月24日（土）1500～1700

2 場 所：稚内総合文化センター

3 講師及び講演テーマ

講演1：安全保障から見た隣国ロシア

防衛研究所地域研究部長 兵頭 慎治

講演2：稚内分屯基地の役割と災害対処

航空自衛隊第18警戒隊長兼稚内分屯基地司令 藤原 弘常

4 議事録

【主催者挨拶】

（北海道防衛局次長 石尾 慎一郎）

北海道防衛局次長の石尾と申します。よろしくお願ひいたします。局長が来られれば良かったのですが、今日は札幌の方でいろいろな自衛隊関係の行事がございまして、代わりに私が参らさせていただきました。本当に今日は天気の悪い中ありがとうございます。

また、このセミナーの開催に当たりましては稚内市の後援を得ております。本日は工藤市長自らの御臨席を賜りまして、重ねて御礼申し上げたいと思います。私どもは北海道防衛局という役所でございますけれども、防衛省・自衛隊の中で行政面で一般市民の皆様方との接点の役割を担っておりまして、その意味でこういったセミナーも年に数回開催させていただいております。今年度で早くも9年目になりました。北海道内では32回目になりますが、稚内市での開催は実は初めてでございまして、市民の皆様方には申し訳なく思うところであります。これからも道内各所でこういった形で開催していこうと考えているところでございます。本日のテーマは「最北の守りと自衛隊」と銘打っておりますけれども、この稚内市という場所にふさわしい内容ということも考えまして、お手元にありますとおりロシア関係のテーマ、それから地元稚内に基地のある第18警戒隊の隊長さんからのお話ということで今日は進めて参りたいと思います。

今年は防衛省にとっても法案の関係や、新しい防衛装備庁という役所を作る等、いろいろな変化がありました。その中でいろいろな議論を国民からいただきましたけれども、私どもはこういったセミナーを通じてその背景となる事情について皆様に考えていただければ本当に意味のあることではないかと思っているところでございます。

それでは時間の関係もございまして、私の挨拶はこの辺にいたしまして、市長、それから講師の方々にマイクを譲りたいと思います。今日はありがとうございます。

【後援者挨拶】

（稚内市長 工藤 広 氏）

皆さんこんにちは。今御紹介いただきました工藤でございます。今日は防衛問題セミナー、大変足下の悪い中、こうして皆様にお集まりいただきまして心から感謝を申し上げます。

北海道防衛局の石尾次長からお話ございましたように、この防衛問題セミナーは

今回で32回目ということで、平成19年度から開催されているようでありまして、多い時で年間5回、少ない時で年間3回。ちなみに今年度は新ひだか町と札幌、そして我が町ということで、稚内は先程のお話にもありましたけれども、初めての開催ということであります。改めて本市で開催していただいたことに、主催者である北海道防衛局の皆様から心から感謝を申し上げたいと思います。

ちなみに、これまで開催されたテーマを先程見せていただきましたけれども、その土地に関係の深い問題、あるいはその時々皆様の関心が高い問題、そういう問題がそれぞれの町でテーマとして掲げられているようであります。今回も先程の御案内のとおり、1つは「安全保障から見た隣国ロシア」、たった43kmしか離れていないロシア、その情勢についてのお話。そしてもう1つは、ここは陸海空、それぞれの分屯基地がごございますけれども、その分屯基地司令から「稚内分屯基地の役割と災害対処」というテーマでそれぞれ御講演をいただくことになっております。

ロシアの情勢は、今お話ししたとおり、交流は交流として、ただ様々な問題については我々も非常に関心を高くして耳目をそばだてながら見聞きしているという思いをしておりますし、そういう意味では日本の安全保障という観点でも今日はその認識を深めていただける、とても良い機会になると思っております。

一方、災害対処ということで言いますと、大災害時における自衛隊の活躍は様々なところで皆様よく御存じだと思います。我が町は災害とあまり縁のない町だと、これまでずっと、あまり大きい声で言う話ではありませんので、それぞれが思っていたんだろうと思いますけれども、去年の8月の大雨による土砂災害、そして今年10月に入ってから1つは爆弾低気圧、1つは台風23号ということで、この異常気象はもはや日本のどこも例外ではないということを思い知らされたところでございます。是非、本日お越しの皆様もそんな思いでこのセミナーをお聞きいただければと願う次第でございます。

改めまして、本日のセミナーが皆様にとって有意義なものとなりますことを心から御祈念を申し上げさせていただきますとともに、御講演いただく兵頭地域研究部長、そして藤原分屯基地司令に感謝を申し上げまして、粗辞ではありますが開会にあたっての挨拶とさせていただきます。今日はよろしく願いいたします。

【講演1】

(防衛研究所地域研究部長 兵頭 慎治)

皆様こんにちは。ただいま御紹介いただきました防衛研究所の兵頭と申します。今日は日本最北端の街であるこの稚内にお招きいただきまして誠にありがとうございます。私はロシア研究者なので、札幌を含めて、北方領土に近い道東地域は何度も足を踏み入れたことがあるのですが、稚内には初めて来させていただきました。サハリンまで43kmというロシアに非常に近い場所で、こうして皆様の前で隣国ロシアについてお話する機会をいただきましたことを心より感謝を申し上げます。

ロシアに縁が深い場所でもありますので、今日は隣国ロシアというのは日本の安全保障にとって今どういう位置付けなのかということについてお話しさせていただきます。まず、少し日本から離れた話から入りますけれども、ウクライナという場所でロシアがクリミア半島を併合した事件がありました。これが一体何を意味しているのか、また東アジアの安全保障にどのような影響を与えているのか。その次に、稚内はサハリンにもものすごく近く、稚内とサハリンの間に宗谷海峡がありますが、この辺を取り巻くロシア軍の動きがどうなっているのかという、普段、防衛研究所が分析あるいは研究している内容の一端を御紹介したいと思っております。そして日露関係全体に関して、

予定されているプーチン大統領の訪日の見通し、それに伴って懸案である北方領土問題がどうなるのか、隣国ロシアと安全保障面で日本はどう付き合うべきかについて、研究者としての個人的な見解をお話させていただきたいと思います。

私が所属している防衛研究所は防衛省・自衛隊のシンクタンクでございまして、防衛省の政策に資するような研究を普段行っています。私はロシアが専門ですので、今のロシアの動き、日露関係の展望等を研究しながら、防衛省全体、更には国全体、ロシアとどう付き合っていくべきかという政策提言を行っております。

まず、ロシアという国ですが、今日本の安全保障にとってロシアはどういう位置付けなのかについて考えてみたいと思います。皆さん御承知のとおり、冷戦時代のソ連は日本の安全保障上最大の関心国であり、ある意味冷戦時代のソ連の存在は、特にこの北海道の地からすると明らかに脅威の対象であったわけです。そのソ連が解体してロシアになり、ロシアも曲がりなりにも普通の国になろうとしていたわけで、当然、今のロシアは、冷戦時代のような日本にとっての大きな脅威というふうには言えなくなった点は御理解いただけるとと思います。他方で日本が安全保障上これから一緒に協力する相手としてどうなんだというところもあるわけです。日本の隣国は、ロシアもありますし、朝鮮半島や中国もあります。どちらかというとな中国や北朝鮮は今の日本の安全保障上の結構大きな関心地域であり、北朝鮮や中国が日本の安全保障にとってどういう位置付けなのかというのは比較的分かりやすいと思います。他方ロシアは果たしてどういう位置付けなのかについて、今一度考え直す必要があるのではないかと考えております。

ソ連が解体して防衛省・自衛隊もロシアとの防衛交流を始め、安全保障協力も少しずつ深めております。しかしながら、先程お話ししたように、2年前にウクライナでクリミア併合という事件が起きてしまいました。ここで少しウクライナの話をしていただきます。日本から離れているのでウクライナがどこにあるのか我々はあまり意識したことがないのですが、ウクライナはロシアとヨーロッパの間に挟まれた大国です。結構面積も大きいので、ヨーロッパの中でも一定の人口と面積を持つ国です。ここに黒海がありますが、ここに面していて突き出した黄色い部分がクリミア半島です。このクリミア半島を何とロシアが併合してしまったのです。私もロシア研究者の端くれとしてずっとロシアを見てきましたが、恥ずかしながら、まさか今の時代にロシアが自らの領土を拡張することは予測できませんでした。これは別に私だけではなくて、多くの専門家がそれを見通すことができなかつたわけです。第二次大戦後にこのような形で1つの国が領土を拡張してしまった。もちろんこれは東アジアから地理的に離れた場所であるとはいえ、我々の隣国のロシアですので、これが与えたインパクトは結構大きかったということになります。

なぜロシアがウクライナでクリミアを併合してしまったかということですが、これはロシアにとってクリミアという場所がものすごく重要な所だったということに尽きます。クリミア半島の先端にセヴァストポリというロシア海軍の基地があります。ソ連が崩壊してウクライナが外国になったので、ロシアはお金を払ってこのセヴァストポリを借りて海軍の基地を置き続けていました。ウクライナに欧米寄りの政権が誕生し、将来的にアメリカ率いるヨーロッパの軍事同盟、北大西洋条約機構（NATO）に入ってしまう可能性が出てきました。ロシアからするとクリミアは戦略的に重要な黒海に突き出た要衝であり、黒海のみならず地中海につながる出口でもあります。そして歴史的にもソ連時代あるいは帝政ロシア時代に不凍港を求めて南下政策を取って獲得したクリミアの軍港を維持したいという強い思いがあったということです。

ただ、もちろんクリミア半島がロシアにとって重要だということは理解できたとし

ても、だからといって併合していいのかということになります。ロシアからすると、必ずしもクリミア半島が重要だから併合したというだけではありません。ここから少し防衛研究所独自の分析となりますが、実はロシアには影響圈的発想というのがあります。影響圏は分かりやすく言うと「縄張り」です。通常、国境線をしっかりと守るというのが国防、安全保障の要ですけれども、ロシアの場合は国境をただ守るというだけでは安心できず、その周辺に自らの影響が及ぶような緩衝地帯（バッファ）を求めます。それは歴史的経緯がありまして、例えばロシアは昔、モンゴル系のタタールという民族に2世紀以上異民族統治された経験があります。それからナポレオンやヒットラーが攻めて戦火を交えたこともあって、やはり国境の周りに自らの影響圏を確保したいという強い思いがあります。ただ、こうした発想は、我々日本人からすると分かりにくいのです。日本人には影響圈的発想というものがありません。日本は島国で海に囲まれていますから、陸続きで隣国と接しているわけではありません。なかなかロシア人のこういう独自の発想を我々は理解できないです。ロシアは旧ソ連地域を地上部分の影響圏であるといまだに考えています。その中でもウクライナは特別な存在です。実はウクライナとロシアは血のつながった兄弟民族、親戚関係です。ロシア料理のボルシチは厳密に言うとウクライナ料理です。ロシアの歴史的なルーツやアイデンティティをたどるとキエフルーシという言い方がされますが、今のウクライナの首都キエフの辺りになります。ロシアからすると歴史的にも文化的にも宗教的にも精神的にも、切っても切れない関係なのが実はウクライナということになります。旧ソ連地域は元々ソ連という1つの国でした。それが今外国になってしまった。中でもウクライナはロシアにとって切り離せない国であり、そのウクライナがロシアの影響圏から離れて欧米側、NATOに入ってしまうということはロシアからすると容認できなかったということになります。

なぜクリミア半島を併合したか、隠された理由の1つは、ウクライナがNATOに入るのを阻止するためにロシアはクリミア半島を併合したとも言えます。なぜクリミア半島をロシアが併合したらウクライナがNATOに入りにくくなるのかということですが、今もってクリミアは国際法上ウクライナの領土であり、ロシアのクリミア併合を国際社会は認めていません。ですから、ウクライナ自身がNATOに加盟しようとした場合、理屈の上ではクリミア半島も一緒に入らざるを得ない。しかし実態としてクリミア半島はロシアに併合されていて、ウクライナに返還される可能性はほとんどない。こういう宙ぶらりんの状況になってしまうと、クリミアも含めた形でウクライナ自身がNATOに入るのは難しくなったということです。いや、それでもクリミア半島は切り捨ててウクライナ本土だけがNATOに入ればいいじゃないかという考えも理屈の上ではあり得ますが、クリミア半島のロシア併合を事実上認めることになりますから、難しいということになります。

実は同じような例は隣国グルジアでもありまして、グルジアも親欧米政権が誕生してNATOに加盟しようとしたのですが、ロシア系住民の多いアブハジアと南オセチアをロシアは一方的に独立を承認し、グルジア政府の主権が及ばない地域にしてみました。こうするとグルジア自体がNATOに加盟する可能性も低下したということになります。NATOは軍事同盟ですから、こういう主権の空白地帯を内部に抱える国はなかなか入れないです。

今のロシアに関してはこの影響圈的発想が強まっており、これがクリミア併合、ウクライナで確認されたということです。クリミア併合がありましたので、日本も含めて欧米諸国はロシアに対して経済制裁を課すようになりました。それ故に、日本とロシアの関係も足踏みせざるを得ない状況が生まれています。ですから、遠く離れたウ

クライナの問題が実は日露関係に直結した問題になってしまったのです。

この中で今何が起きているかという、今度は中東のシリアにロシアが空爆を始めるといふ新しい動きが起こっています。対IS（イスラム国）を攻撃するためという名目でロシアがシリアに空爆、ミサイル発射などの軍事行動を行っていますが、ロシアが中東に軍事行動を行うのは第二次世界大戦後初めての出来事で、これも今国際社会で大きなインパクトをもたらしています。ですから、ウクライナとシリア、中東でロシアは軍事的なプレゼンスを示し始めているということになります。

ただ、ここまでの話は日本からちょっと地理的に離れたヨーロッパの話ですが、ここから私独自の分析と言いましょか、日本や日露関係、場合によってはこの稚内に大いに関係ある話に繋がってきます。ロシアは旧ソ連地域を地上影響圏と見なしているという話をしましたけれども、最近はここだけではなく、もう1つ自らの影響圏と認識し始めている地域があります。私はそれを洋上影響圏という言い方をしていますが、海の上の自らの縄張りとして認識し始めている地域があるのです。具体的には、北極、それからロシアは極東という言い方をしますが、分かりやすく言うとオホーツク海です。北極とオホーツク海の2つを、ロシアは自らの影響圏と認識し始めているのではないかと私は考えています。

なぜそういうことが言えるのかという、2012年にプーチン大統領が大統領として再登板を果たしました。プーチン大統領は、上半身裸でマッコブりを示したり、戦闘機やスポーツカーに乗ったり、虎と格闘したり、鯨を撃ったり、いろんな事をされるわけです。柔道は8段です。ちなみにプーチン大統領は今年で63歳になりました。大統領の任期は2018年までなので、まだ2年あります。もう1期務める可能性が高いとみられています。63歳だとまだまだ若いじゃないかと皆さん思われますよね。それでも、63歳という数字はロシアの男性の平均寿命なんです。すでにプーチンはロシア人の男性の平均寿命に達しています。2018年の大統領選挙で再選されると、大統領任期が6年なので、2024年まで大統領を務めることになります。2024年まであと9年で、72歳となります。我々日本人の感覚からするとあり得るということになりますが、ロシア人からするとプーチンは72歳まで務められるのか、健康不安はないのかということになります。ロシアみたいな強大な国だと、大統領、トップの為政者の健康不安が出ると、一挙に権力闘争が起こって足下をすくわれることがあります。こういうマッコブりをアピールするのは、御本人の趣味でやっているわけではなくて、健康不安はありませんよということを、定期的にロシア国民に示す必要があるわけです。

プーチン大統領が2012年に大統領として再登板を果たした5月7日、その日にプーチン大統領はロシアの軍事に関する大統領令を出しました。ロシア軍に対して最初の指示を出したのですが、その内容が北極・極東の海軍増強だったのです。極東とはオホーツク海を指しています。北極と極東だけを指して、陸海空の中でなぜか海軍だけを強化しろと指示を出したのです。なぜ北極と極東（オホーツク海）なのだろう、何で海軍だけなんだろうと私も非常に不思議に思っていたのですが、その後3年たって徐々にその意味が分かってきたのです。

ロシアが北極とオホーツク海にこだわる理由として、地球温暖化によって北極の氷が溶け始めて、北極海航路という新しい船の通り道ができることがあります。北極海は無尽蔵の天然資源が眠っている場所でもあって、当然ロシアはそこを自分の縄張りとして固めておきたいと考えています。また、北極に関してはロシア以外にもいろんな国が進出を始めているという背景があります。

そうすると、北極とオホーツク海は一見離れていて別々のように考えがちですが、

北極海航路という新しい航路によってこの2つの海域が結ばれつつあるとロシアが認識し始めていると思われます。具体的なお話をします。今一番北極海に進出しているのは中国です。中国の海洋進出は東シナ海と南シナ海の話ばかり注目されますけれども、実は北の方にも及んでいます。中国の砕氷船「雪竜（スノードラゴン）」が、ほぼ毎年北極探査を行っています。一例として2012年のルートを御紹介しますが、往路が中国の青島から日本海を越え、稚内とサハリンの間の宗谷海峡を抜けてオホーツク海に入り、千島列島の北部を抜けて太平洋、ベーリング海を通りました。通常、北極海航路はロシア沿岸200海里の排他的経済水域（EEZ）の中を通るルートを目指しますが、中国の砕氷船はこのルートを通してアイスランドのレイキャビクまで航海を行いました。帰りですが、砕氷船は氷を砕きますから、北極点の真上のルートを通して中国に帰りました。ロシアが影響圏と考え始めている北極海とオホーツク海を、北極海航路という形で中国の船はすでに通り始めています。これに関してロシア軍は軍事的な反応を具体的に示し始めています。

ロシアは、以下の2点について懸念しているようです。1つは、中国の砕氷船がオホーツク海を通っているということ。オホーツク海はロシア軍にとってどういう場所か御存じでしょうか。冷戦時代からロシアはオホーツク海を戦域と呼んでいて、外国船、特に軍の船は入れたくない海域と考えています。なぜかというところ、ここに原子力潜水艦を配備しておいて、冷戦時代であれば何かあれば核ミサイルをアメリカに撃つという非常に重要な海域であるとロシアは考えています。これから北極海航路が実用化されて多くの外国船が通り始めるようになると、この宗谷海峡、オホーツク海、そして千島列島が北極海航路の一種の抜け道になる可能性があります。

もう1つは中国の砕氷船が北極点の真上のルートの航行に成功したということです。通常の北極海航路はロシア沿岸を通るルートで、北極点の真上は夏場でも氷がありますからそう簡単には通れないのです。それにも関わらず、中国は北極点の真上のルートの開拓に成功しました。ロシア沿岸ルートを通る場合はロシアの許可を取る必要があります。ロシアへの事前申請、ロシアの砕氷船のエスコート義務、それに対してお金も払わなくてははいけません。ですから、ロシア沿岸ルートは、ロシアが間接的にコントロールできるのです。しかし北極点の真上のルートを通られるとロシアとしてはどうしようもないわけで、ある意味、中国の北極進出に対してロシアは歯止めを掛けることができなくなっています。これが2012年の動きです。

これ以降中国の北極進出はさらに進化しています。砕氷船は軍の船ではありませんが、今、中国軍の船がどこまで来ているか御存じでしょうか。これは防衛白書にも出ていますが、2008年に津軽海峡を初めて通峡しました。2013年には、ついにここ稚内から見える宗谷海峡を通りました。2013年にはウラジオストクで中国とロシアが合同の海軍演習を実施したのですが、それが終わった後中国の海軍の船5隻はそのまま中国に帰らないで北上し、宗谷海峡を抜けて史上初めてオホーツク海へ進出しました。そして北方領土の択捉島とウルップ島の間を抜けて、日本をぐるっと1周する形で中国に帰ります。これが2013年の動きです。

当時のロシアのメディア等の観測記事によると、ロシアが影響圏と考えているオホーツク海に中国軍の船が立ち入ったことに対して、プーチン大統領が激怒したと言われています。そこでプーチン大統領は、中国軍の船5隻がウラジオストクで合同軍事演習を終え、北上を始めた段階で、ショイグ国防大臣に対して24時間後に抜き打ちの軍事演習を実施するよう命じます。そして、16万人規模のソ連解体後最大級の軍事演習を、オホーツク海及び地上部分では中露国境等で実施しました。表向きは中国軍の船のオホーツク海進出とは無関係と説明していますが、どう見てもタイミング

が合っているような感じがするわけです。そして2015年の夏もウラジオストクで中国とロシアによる合同海軍演習が行われました。当然のことながら、演習終了後、中国軍の船は中国に戻らず、また北上して目の前の宗谷海峡を通りました。その後どこまで中国軍の船は進んだか御存じでしょうか。なんと、アラスカ沖のベーリング海にまで到達したことをアメリカの国防省が公表しています。

中国軍の船は、2008年に津軽海峡、2013年に宗谷海峡を通っています。中国による北方海洋進出は、ロシアの想定よりも早いスピードで行われています。さらに今年はベーリング海まで中国軍の船は北上してしまっただけです。そうするといずれ北極に中国軍の船が来るのも時間の問題ではないかとロシアは考えているのです。最近のロシア極東地域におけるロシア軍の軍事活動を見ていると、やはり中国を視野に入れた部分が一定程度あり、それは徐々に増えていると思われま

す。2014年12月、ロシア軍は北極に統合戦略司令部という新しい5番目の司令部を発足させ、北極の軍事プレゼンスを強化しています。例えばノヴォシビルスク諸島に冷戦時代にあった空軍基地を復活させたり、ウラジオストクに本拠を置く太平洋艦隊もこのベーリング海や北極で上陸演習を始めています。将来、北極の氷がだんだん溶けて開かれた場所になって、軍事展開が可能な新しい戦略正面になることを見込んだ上で軍事力整備を行っていると考えま

す。これが日露関係にどのような影響を及ぼすのでしょうか。影響は相当あるということになります。北方領土問題に話は移りますが、現在、北方領土の択捉島と国後島にはロシア軍約3,500人が駐留していて、軍の近代化や装備の拡充を行っています。北方領土は我が国固有の領土ですから、日本は当然、こうした動きを批判しています。一見、北方領土の軍の近代化は、日本等を牽制する目的で行われていると受け止めるわけです。しかし、最近、ショイグ国防大臣や軍高官は、北極防衛の一環で国後・択捉の軍の近代化をやっていると明言しています。つまり、北極海航路が現実なものとなる中で、千島列島、ロシアはクリル諸島と呼びますが、ここもしっかりと防衛しなくてはならない、つまり北極の絡みで国後・択捉もしっかり軍の近代化をしなくてはならないという発想になっているよう

です。北方領土問題を見る際も、その部分だけを切り取るのではなく、北極という絡みで理解をしておく必要があります。その背景としては、北極とオホーツク海の軍事的な価値が高まっているとロシアは考えていて、しかもこの2つを北極海航路でつながった1つの戦略正面と見なし始めているというのが私の分析です。北方領土を含む千島列島はオホーツク海と太平洋を隔てるフェンスの役割をしていて、これは冷戦時代からそういう意味で重要だったのですが、北極がロシアにとってより重要な場所になればなるほど、千島列島やオホーツク海、さらには宗谷海峡の位置付けも高まっていくのではないかと考えま

す。最近、宗谷海峡におけるロシア艦艇の通峡件数は増えています。また、オホーツク海での軍事演習も拡充の傾向にあります。もちろんウクライナ及びシリアでロシアは軍事的な動きを示しているため、それに合わせて極東周辺でも軍の動きが活発化しています。我々からすると、ウクライナやシリアでロシア軍が行動していることもしっかりと見ながら、更に北極の動きも見ながら、オホーツク海、北方領土を見ていかなければなりません。だから北方領土やロシア極東地域だけを切り取って理解しては、全体像が見えないのではないかとというのが私の主張です。

こういう動きを示すロシアと我が国は安全保障面でどう付き合うべきなのでしょう

書です。そこで、ロシアについてこのように書かれています。「東アジア地域の安全保障環境が一層厳しさを増すなか、安全保障およびエネルギー分野を始めあらゆる分野でロシアとの協力を進め、日露関係を全体として高めていくことは、我が国の安全保障を確保する上で極めて重要である。」

ポイントは2箇所あります。1つは「東アジアの安全保障環境が一層厳しさを増すなか」という部分です。日露関係を強化するべきだという文脈の中で必ずこの表現が枕詞になります。「東アジアの安全保障環境が一層厳しさを増す」、これは中国や北朝鮮のことを言っているわけですが、この文脈でロシアとの関係を強化する必要があるという発想です。それからもう1つは「安全保障及びエネルギー分野を始めあらゆる分野でロシアとの協力」と書いてあります。エネルギーよりも、安全保障を先に書いています。エネルギー協力や経済協力は日露関係の協力の分野としてこれまでずっとある話です。ただ、エネルギー協力の主体は、ロシアの天然ガスや石油を購入する民間企業となります。他方、安全保障は国が主導して行う話であり、この戦略文書において、日本は安全保障協力をこれからロシアと進めていくと書かれています。これに基づき、2013年に日露の2プラス2（外務・防衛閣僚協議）が始まりました。ロシアと日本の防衛大臣と外務大臣が一同に会して戦略協議をするという枠組みです。しかし、ウクライナ問題が発生してしまったので、ロシアと安全保障協力をやっていくことが果たしてどうなのかという問題を突き付けられており、今、安全保障上ロシアとどう向き合うのか、日本にとっては非常に微妙な問題になっています。

もちろんウクライナやシリアの動きを見ていると、安全保障上やはりロシアは問題のある行動を起こしています。しかし他方で東アジアの安全保障環境はヨーロッパとは違います。東アジアでは中国の問題等があるわけですから、ロシアとの安全保障上の関係を切り捨てていいのかという問題も出てきます。さらには、日露には未解決の北方領土問題が残されています。ようやく日露双方とも比較的安定した政権が誕生する中で領土交渉を進める環境が整いつつあるわけで、こうした状況を総合的に勘案してロシアとの安全保障協力のあり方を考えていく必要があります。

北方領土問題の見通しについて、私の個人的見解をお話しします。これまでは外務省の事務レベルで協議を続けてきたわけですが、これが首脳レベルでの政治協議の入口に立てるかどうかが、そこが来たるプーチン大統領の訪日の焦点であると見ています。それでも最近のロシアの動きは日本に対して挑発的じゃないかと思われるかもしれません。メドヴェージェフ首相やロシアの閣僚が相次いで北方領土を訪問したり、サケ・マスの流し網漁が禁止されたり、拿捕事件も北方領土の近くで起きました。非常に強硬な姿勢も片やロシアは見せている。しかしプーチン大統領は、日本との関係強化、相互に受入れ可能な解決策などと発言し、引き続き領土問題に関しては前向きな姿勢も見せています。プーチン大統領は片や日本との関係強化という前向きなことを言いながら、メドヴェージェフ首相以下閣僚等は相次いで北方領土を訪問するなど強硬な姿勢を示している。両者に矛盾があると我々は思うのですが、実はこれはロシア流の一種の交渉術なのです。過去にもこのパターンはあります。左手で握手をしながら右手でジャブを入れる。私の理解からすると、北方領土交渉自体はロシアとしてはやる用意があるということです。けれども、交渉結果に関しては必ずしも日本が満足するようなものにはならないですよと、今の段階から硬軟両面で日本に揺さぶりを掛けて、ロシアに有利な交渉条件を作り出そうとしているのです。

今年の7月以降、急速にロシアの対日アプローチが様々な形で日本に振り向けられています。なぜロシアはそこまでして日本に注目しているのかということです。理由は中国とロシアの関係にあると思います。ウクライナ危機でロシアは国際社会から孤

立するあまり、中国傾斜が進んでいます。中国とロシアの関係は政治的には良好だと言われますが、私に言わせると、「離婚なき便宜的結婚」の状態です。軍事同盟に発展するような関係ではないが、むしろ潜在的な相互不信の方が強い。そして今経済的には完全に中国の方が上、ロシアが下という上下関係になっています。ウクライナ危機によってロシアが欧米と関係を悪化させる中、中国に傾斜していますが、そのまま傾斜を続けていいとプーチンは思っていないでしょう。それをやると、ロシアは中国の軍門に降ることになるからです。プーチンからすると一方的な中国依存にならないように、中国以外のアジアの国、特に中国とは少し距離を置くような国との関係強化を進めざるを得ないのです。具体的にはインド、ベトナム、そして日本です。

それと同時にロシアは日本との経済協力や資源協力を進めたいと思っていますが、それ以上に安全保障上、日本との関係を強化をしたいと考えています。日本海で10年以上続けている海上自衛隊とロシア海軍の共同訓練の強化にも、ロシア側は強い関心があります。ロシア側に言わせれば、できれば日本海だけではなく、もう少し北の方、場合によってはオホーツク海や将来的には北極でもやりたいと考えているようです。新しい協力分野である北極において日本と何らかの協力がしたいという思いもロシア側にはあるようです。安全保障の問題だけではなく、北極の資源開発等でもロシアは日本に対して協力を呼び掛けています。

今、日露関係を取り巻く動きはかなりダイナミックであり、我々は狭い地図、特に北方領土周辺の狭い地図の中で理解するのではなく、もう少し俯瞰した広い地図の中で、ロシアが今何を考えているのか、ウクライナやシリアで何をしているのか、その影響がどう東アジアに及んでいるのか、また、北極の話も含めてロシア極東地域におけるロシア軍の動きも観察していく必要があると考えております。その中で非常に日本にとっては難しい局面なんです、どの程度ロシアと安全保障協力をすべきかということも改めて考えていく必要があるかと思えます。いずれにしても宗谷海峡、オホーツク海、そこに面している稚内も今後ますます重要な場所になってくる、もっとも注目しなければいけない地域になってくると思っております。

御清聴ありがとうございました。

【質疑】

質問者1：大変ためになる講演をありがとうございました。最後の北極海航路に関して、海上自衛隊が共同で訓練を行い安全保障分野の協力が進んでいったとして、領土問題も解決しなければならないと思うんですが、日本にとって北極海航路は将来新しいシーレーンにもなりうると考えておられるのかお聞かせいただきたいと思えます。

兵頭部長：非常に重要な御質問をいただきました。北極海航路自体はまだ現段階では夏場の4箇月から長くて5箇月ぐらいしか使えないもので、通年航行は実現していません。日本の商船三井等も北極海航路を実用化することは既にアナウンスしていますが、ビジネスとして成り立つかという点はまだまだ時間がかかるようです。他方、北極海の氷が縮小して地球温暖化はますます進むわけですから、時間とともに北極海の問題は国際政治や国際関係の大きなテーマとなり、中国のみならず韓国、シンガポール、インドといった国々も北極に関心を持ち始めています。オホーツク海のマガダン沖で日本とロシアが共同で石油の探査を行うという計画があります。2年前のプーチン大統領と安倍首相の首脳会談の時に明らかにされました。もしここで石油が取れるように

なれば、日本のタンカーは将来的にオホーツク海に入っていくこととなります。オホーツク海は、ロシアにとってできる限り外国船を入れたくない地域なのですが、資源開発や共同訓練など、日本とは協力してもよいと考えているようです。こういう共同の資源開発が進んでいくと、少なくともオホーツク海ではシーレーンの話が将来的に出てくる可能性は十分にあります。

もう1つ加えてお話しすると、影響圏というロシアの発想の中で日本がどういうふうに見られているかということ、旧ソ連地域といった地上影響圏への侵入者は、NATO拡大にみられるように欧米と思っているわけです。また、洋上影響圏に関しては今一番北極に進出している中国となります。ロシアからすると、日本は地上影響圏はおろか洋上影響圏への侵入者とは見ていないのです。むしろ、北極やオホーツク海では日本とは協力できるとしているようです。そういう点からしても、オホーツク海や北極海でロシアと資源協力や安全保障協力を行う余地はあると思います。

【講演2】

（航空自衛隊第18警戒隊長兼稚内分屯基地司令 藤原 弘常 1等空佐）

皆様こんにちは。ただいま御紹介に預かりました、航空自衛隊第18警戒隊長兼ねて稚内分屯基地司令の藤原です。皆様におかれましては日頃から防衛省・自衛隊に対する御理解、御支援、御協力誠にありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。今日の題目は「稚内分屯基地の役割と災害対処」ですが、日頃から航空自衛隊が何をしているのかよく分からないと言われておりますので、大きな概要から稚内分屯基地まで順番にお話ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず自己紹介です。航空自衛隊はこういう時必ず自己紹介をするのですが、私は海上自衛隊に3年間勤務してから航空自衛隊に替わったのが少し経歴が特異なところです。仕事は元々管制官です。航空自衛隊には管制官が2種類ありまして、1つは羽田や千歳で管制塔に登って飛行場周辺の管制をする航空管制官。もう1つは航空自衛隊だけの、というか他の軍隊にもありますが、要撃管制官（ウェポンコントローラー）です。穴蔵に潜ってレーダーで見た情報で緊急発進（スクランブル）を掛けたり、緊急発進した戦闘機に対して右に行けとか左に行けという指示をします。航空管制官と違って要撃管制官は全ての作戦に関与しており、航空管制官は飛行場周辺しか見えないのですが、要撃管制官は日本全体を見て仕事をしているという状況なので、そういう面でもいろいろなお話しができると思いますのでよろしくお願ひします。

講演の内容については、まず航空自衛隊の概要から始まり、稚内分屯基地の役割、さらにテーマである災害対処についてお話しします。

航空自衛隊の概要としては、航空自衛隊の任務、特に対領空侵犯措置の状況、また編成・組織を御説明します。

航空自衛隊は、平時から有事まで、平時でも警察権と言われていますが、我が国の空を守る唯一の存在です。航空自衛隊は約4万7千人、作戦用航空機約340機です。これが多いか少ないかは別にしまして、340機というのは戦闘機の数だけでなく、輸送機や救難機等を含めた数です。おおむね海上自衛隊と同じような規模です。陸上自衛隊に比べると4分の1ぐらいのところですよ。

主な任務は、警察が領空侵犯機を取り締まることができないため、空自が領空侵犯機に対処しています。空における警察という役割です。主たる任務は防衛出動で、その他スライドに載っているような任務もあります。

航空自衛隊だけが持っている任務が領空侵犯に対する措置です。要撃管制官は大体

こんな感じで仕事をしています。ここにレーダーサイトから来たデータが全部映って、飛行機の管制を行います。大体どこの国もこういう形のパソコンの画面を見て飛行機を管制している状況です。その他にも災害派遣、これは9月に関東及び東北地方で水害がありましたが、航空自衛隊からは百里基地の救難隊が災害派遣に出ています。そのほか国際平和協力業務でPKO等に行く車両や物資等の輸送等も実施しています。

これは対領空侵犯措置の状況をポンチ絵で示したものです。日本には稚内ほか28箇所のレーダーサイトがありますが、レーダーサイトでは飛行機をまず見つけ、そのデータが全て防空指令所（DC）に送られます。稚内の基地で捉えた航空機のデータは全て青森県の三沢基地にある防空指令所に集まって、そこでこの飛行機は民間機なのか軍用機なのか、日本に入ってきていい飛行機なのか悪い飛行機なのかを識別（アイデンティフィケーション）します。軍用機で日本に入ってきてはいけない、飛行計画（フライトプラン）がなくて許可されていない航空機の場合は緊急発進を掛けます。私も緊急発進を何度も掛けたのですが、私がスクランブルと言えれば航空団でアラートというか飛行機が待機していて、そこでベルが鳴って、パイロットが走って飛行機に乗って離陸するというような手順です。飛行機のレーダーは地上のレーダーよりも見える範囲が狭いので、パイロットは離陸してもすぐ相手が見えない状況なので、必ず誘導を受けなければいけません。そこで要撃管制官が戦闘機を誘導し、パイロットが実際にレーダーで捉えて目視で確認できるところまで誘導します。その後はパイロットが自分たちで目視なりレーダーで監視をします。状況の確認とは、相手の飛行機がどこの国のどんな飛行機なのかを確認することです。実際に写真も撮ります。パイロットがカメラを持って行って、一人乗りですが操縦しながら写真を撮って帰ってきます。特に領空に近づくようであれば、「あなたは領空に近づいているので方向を変えなさい」と通告を実施します。それにも従わないで、領空に入ってくると領空侵犯機と判定されて、今度は警告を発します。軍用機の場合は強制着陸という措置を執ることとなっています。これが一連の対空警戒の流れです。地上のレーダーサイトの他に早期警戒管制機、AWACSとE-2Cも使って探知に努めています。

これは航空自衛隊が始まってから歴代のスクランブル回数です。一番多かったのが昭和59年の944回。昨年がそれに次ぐ943回という回数です。見て分かる通り、この部分はソ連が一番活躍していた時期です。私は平成2年に三沢基地に配属され実際見ているのですが、ちょっと少なくなった時期なのですが、この頃には樺太及び北方4島にも戦闘機の基地があってそこから発進していたという状況です。その後ソ連が崩壊してロシアになってから、軍事力がガタガタになってこういう形になっています。その後は今のようにロシアが力を盛り返してきた、また尖閣で中国が活動し始めたということで、スクランブルの数が増えています。今年の9月30日までのスクランブルの回数は343回で、去年に比べれば今年は少なくなるのかなとは思っておりますが、今後どうなるかは相手の動き次第なので、はっきり明言することはできません。

これは過去の方面隊別のスクランブル回数です。北空というのは北海道・東北エリア、中空は関東から中国四国まで、西空は九州、南混は沖縄を担当しています。北空だと大体ロシア機が相手です。中空だと日本海側に出てくるロシア機と太平洋側を歩いていくロシア機、西空だと対馬海峡を通峡して東シナ海に出てくるロシア機や中国機を相手にしています。南混だと大体が中国機又は台湾機が対象となっています。御覧のように南混が急に尖閣の状況で増えて、スクランブルの回数自体も段々増えている現状です。

こちらは国別に分けたものです。ロシアは特に去年が多かったという印象がありま

す。中国は段々本当に増えてきています。そのほか台湾、北朝鮮がありますけれども、やはりメインはロシアと中国です。ロシア機については稚内周辺でも活動が活発になっています。

先程の話にもありましたけれども、これが9月15日に領空侵犯した時の航跡図と言われているものです。約16秒間領空に入っております。実際に戦闘機が付いておらず、何なのか分からないので推定となっています。実際に戦闘機が目視確認した場合は写真を撮って公表していますが、そこまで行っていないので推定という状況です。

これが今年の上半期におけるロシア機や中国機等の緊急発進の対象になった飛行機の航跡です。稚内付近だと礼文・利尻に向けて飛んできて、奥尻辺りまで来て反転するパターン、輪島沖まで来て反転するパターン、こういうパターンはうちのレーダーサイト等を見ているのかなと思いますし、その他、ここだと韓国の動きまで見ているパターンです。こちら側では三陸沖まで出てきてうちの活動を見ているという状況です。その他、この辺りでは向こう側も演習をやっている状況です。中国は中国で、ここはオイルリグとか尖閣諸島があるので活動が活発化しているのと、数年前から沖縄本島と宮古の間を通過して太平洋側に進出するような飛行パターンが出てきています。去年の場合はこれに加えて、ロシアが対馬海峡を通峡して沖縄と宮古島の間を通り、伊豆沖を通過して沿海州に戻るという日本一周パターンをやっています。そういうパターンで飛ばれると、千歳、三沢、小松、築城、新田原、那覇、帰りは新田原、小松、百里、三沢、千歳の各基地でスクランブルを掛けるという状況が発生しますので、スクランブルの数が多くなっています。

続きまして、簡単に航空自衛隊の編成等を御説明いたします。航空総隊は戦闘機等を持っているところです。航空支援集団は輸送機を持っており、航空教育集団は教育を行う組織です。そのほか、新しい装備の開発等を行うところ、補給関係を行うところ等があります。第18警戒隊は航空総隊の隷下に入っています。

航空総隊は総隊司令官のほかに北、中、西、南混という4つの方面隊の司令官等があり、その下に戦闘機部隊、航空警戒管制部隊、ペトリオットの部隊である地対空誘導弾部隊があって、それぞれ任務に就いています。また、航空救難団は航空総隊の隷下に入っており、災害派遣はこの部隊が主に行っています。航空自衛隊の場合は、特に災害派遣は他の自衛隊と違って救難機による救難や急患空輸がメインとなります。実際に船の関係者の方に言われたのですが、航空自衛隊の場合は北海道や地方公共団体が出られない、警察も出られない、海上保安庁も出られないという時に最後に空自に要請が来るので、かなり厳しい状況で災害派遣を実施しています。

続いて戦闘機部隊です。戦闘機部隊は先程ありましたように千歳、三沢、百里、小松、築城、新田原、那覇の各基地に展開しています。那覇基地は昔F-4でしたが、あまりにも尖閣の動きが激しいので百里基地のF-15を那覇基地に持ってきて那覇基地のF-4が今百里基地に行っています。今1個飛行隊で対応しているのですが、やはり対応が厳しいということで、今後築城基地のF-15を那覇基地に持ってくる予定です。明日、築城基地で航空祭がありますが、最後のF-15のフライトということで練習しているとホームページ等で紹介されています。

続いてレーダーサイトです。稚内を始め全国28カ所にレーダーサイトがあります。そのほかレーダーが壊れたり何かあった時に移動して対応する移動警戒隊が各方面に1個ずつあります。また、空飛ぶレーダーサイトはAWACS（E-767）が浜松基地に4機。またE-2Cは三沢基地に全部で13機ありましたが、そのうち4機を那覇基地に持って行って、第603飛行隊として新編して対処しています。尖閣対処で中国の動きが激しくなったためこういう対処をしています。そのほか予算上は新し

いタイプのE-2Dを4機購入することが決定しています。レーダーサイトでピンク色の場所はBMD対応、大陸間弾道弾に対応するためのレーダーです。新しいレーダーは大体こういう仕様が変わっています。あと、カメラレーダーと言われる大湊、下甕島、与座岳、佐渡の各分屯基地のレーダーもBMDに対応できるレーダーです。

ちなみに、私は第18警戒隊長と言いましたけれども、なぜ18かというと、最初米軍が全部運用していましたが、その時にポスト18というナンバーで運用していたのでそれを踏襲して第18警戒隊となっています。

続きまして、稚内分屯基地の役割です。御存じのように稚内は陸海空自衛隊が一緒にいるという全国でも珍しい稀な部隊です。沿革は昭和5年に海軍ノシャップ通信所が最初に置かれたと聞いております。その後米軍が進駐してきて航空自衛隊は昭和29年に置かれました。その他に陸自、海自がいます。写真は米軍時代のものです。基地を御覧になられた方は分かりますが、米軍時代の残りの建物がまだあります。航空自衛隊のレーダーサイトの中では一番広い面積を持っています。

任務はレーダー等による航空機の警戒監視をメインとしております。この写真がレーダーです。見たとおりかなり古くて、昭和62年にできたレーダーで、もう28年経過しています。

次に周辺地域とのつながりです。北門神社御輿支援は、今年は隊員を100人出しました。来年7月5日が火曜日なので、どうなのかなと今悩んでいるところです。平日なので休暇を取らせるかそれとも命令で出すか、100人も休暇を取らせるのかという話になりますし、じゃあ命令で出したら今度は酒は飲めないぞという話になり、神輿を担ぐのに酒が飲めないんだらと、どうやって支援しようかと思案しているところです。そのほか開庁記念日、稚内の開庁記念日は一遍に陸海空の装備を見ることができなのが特徴です。てっぺん踊りは今年も敢闘賞でした。もっといい賞をもらいたいと思っているのでがんばります。これは、みなみな祭りです。多分来週青年会議所の方が来られて、来年もお願いしますと言われると思いますが、来年も支援する予定です。

ここからが本題ですが、災害対処についてです。空自が実施しているのはおおむねこの3つで、特に洋上での船員等の救難が多いです。また、この写真は御嶽山です。私が沖縄にいた時、台風の後には船が流されたということで災害派遣がかかって、ヘリコプターを出しました。しかし風が強く、ヘリは大体100ノットぐらいしか出ないところ、台風の後なので風が20~30ノット、風速30~40mでした。100ノットしか出ないヘリコプターに20~30ノットの風で、追い風だと行きは良いですが帰りは向かい風で全然ヘリが進まない等、中々ヘリだけだときつい部分もあります。

稚内分屯基地が実施した災害派遣です。これは近傍派遣です。主に火災に対して出動しています。私が来てからも、去年ノシャップの海沿いの小屋が燃えたということで消防車を派遣しています。その他特異なのは吹雪で交通機関が停止し、小中学生の搬送を実施しています。基本的に災害派遣を要請できるのは都道府県知事です。また受ける部隊が航空自衛隊は千歳の第2航空団千歳基地司令で、海は大湊地方総監部、陸は名寄の第3普通科連隊長です。基本的には北海道庁が連絡することになると思いますが、陸海空自衛隊どちらに一報を出せば良いか、そういうアドバイスのことは稚内分屯基地の方でもやります。協力関係で必ず出るようになっていますので、陸上自衛隊に要請したから航空自衛隊が出ないということはありません。

稚内でもこの前の爆弾低気圧や去年の大雨があり、LOという連絡幹部を市役所に出すかどうか私も悩んでいました。ただ、エフエムわっかない(FMわっぴ〜)の災害報道がすごくて、あれを聞いていれば大体の動きが分かりました。この間の爆弾低

気圧もそうですけれども、災害の時は必ず私の指揮所に市からもらった防災ラジオを持って行ってつけておく。それで情報が入れば、相手も忙しいので、いちいち稚内市に電話することなくやっていますが、どうしようもない状況になったら稚内市にLOを派遣することになります。特に去年はFMわっぴ〜が市の対策本部に入って実況してくれたので、状況がものすごく分かりやすかったです。あれはすごく有効だと思っています。

災害派遣の装備品です。特異なものはありません。こういうものを持っていますというところです。開庁記念日等でもお見せしています。

何かあった時のために常に訓練は実施しています。これが平成25年度稚内市の防災訓練に参加した時の写真です。来週の火曜日、11月2日にまた実施されるということで、自衛隊も陸海空が参加して訓練を実施します。

これは前回の稚内空港の消火避難訓練に参加した時の写真です。この日はものすごく天気が良かったのですが、次の日が爆弾低気圧で、稚内空港で風速40メートルの風が吹いて空港が閉鎖になりました。ああいう風が吹くと中々飛行機は飛べないのかなと思います。飛行機が飛べないというよりも、地上で作業する人の安全が保たれないため空港を閉鎖という状況になりますので御了解をお願いします。

次に東日本大震災での対応です。稚内からは航空自衛隊だけですが御覧のとおり派遣しております。東日本大震災では陸海空で役割がありまして、航空自衛隊が対応したのは航空輸送です。道路が寸断されているので、九州や関東から輸送機により資材や物資、人員を送り込むという輸送をメインに行っております。ヘリでの捜索等も当然行っています。航空自衛隊は稚内から宮古島まで全部の基地から隊員を派遣しました。私はその時経ヶ岬の分屯基地司令でしたが、経ヶ岬からも実際に派遣しました。

特徴的だったのは、本来は災害派遣の基盤となる航空自衛隊の基地自体が被災したということです。松島基地ですが、F-2やT-4が流されているという写真を見られた方もいると思います。実際このような天気だったので飛行機を離陸することができなかったのは事実です。当時の松島救難隊長が私の同期ですが、飛行機を離陸させられなかったのを今でも悔やんでおりましたが、天象気象にはやはり勝つことはできないのかなと思っています。

ちなみに、F-2が流されて使えなくなり、航空自衛隊としてどうするかということで、新しく買い換えることも考えました。しかし、製造元の三菱重工業は、既に生産ラインを終えていて新しくもう1回生産ラインを立ち上げると莫大なお金が掛かるということだったので、壊れた飛行機から使える部品を集めて飛べるような状況にしました。今年その第1号機が完成して、小牧基地から三沢基地に送られ、航空幕僚長が実際に乗られて安全だと確認して飛行しているところです。三菱側はMRJの生産が始まっていて、どうしてもそちらのラインを確保しなければならないということもあり、結局航空自衛隊としては壊れた部品を集めて使えるものにするという選択をしたところです。

松島基地の派遣概要ですが、災害復旧支援隊は約1,000名態勢でこういった形でいろいろ行いました。まだ当時の基地司令も航空自衛隊にいまして、当時の状況について講話をしているところです。活動状況はスライドのとおりです。やはり航空輸送がメインで、CHやKCで輸送しました。その他松島基地近傍でそれぞれ捜索や民生支援を行いました。

余談ですが、この飛行機はKC-767といいます。空中給油・輸送機で4機しかなく、航空自衛隊とイタリア空軍だけが持っています。昨日、新しい空中給油機KC-46Aを4機買いますと大臣から発表されています。ただ、母体になっているのは

いずれもボーイング767で、今日も稚内と東京間を飛んでいる飛行機と同じ飛行機です。新しく買うKC-46Aも母体は767です。なぜ同じ型の飛行機を買うのかというと、整備の時に共通性があるためです。AWACSも767が母体になっています。パイロットの操縦等も考え購入しているところです。

最後ですけれども、稚内分屯基地は、最北の自衛隊の部隊として皆様とのつながりを大切にして今後も努力していきたいと思っております。

以上で説明を終わります。どうもありがとうございました。

【質疑】

質問者1：非常に貴重なお話を聞かせていただきましたが、大きく3点お聞きしたいと思います。スクランブル発進は随分な回数が行われているということで、非常にびっくりしました。いくつかの手順を経て最終的には強制着陸に導くそうですが、強制着陸という事案が過去あったのかということ。そして強制着陸の手法が可能なのかということ疑問に思ったのですが、どうやって強制的に着陸させるのか、相手方は従うのか、場合によっては銃撃戦等にならないのかということが分かりませんでした。また、北海道は広いですが、稚内には多分戦闘機はないと思うので千歳から来るのかと思いますが、全道一円をカバーできるのかどうか、例えば戦闘機は稚内から千歳までどのくらいの時間で飛行できるのか、その辺りを教えていただけたらと思います。

藤原司令：ありがとうございます。まず最初の強制着陸の件ですけれども、強制着陸を実施したという事例は航空自衛隊ではありません。どうやって相手に意思を伝えるかというのは国際民間航空機関（ICAO）に加盟しているところでは基準が全世界で決まっています。飛行機が羽根を動かして付いてこいとか、後は国際緊急周波数がありまして、通常の飛行機だと必ずモニターして聞くことになっています。ですから国際緊急周波数で通告から警告に至るまで全部英語等で相手に伝えていきます。強制着陸だと私の誘導に従え、follow my guidanceという英語で伝えていくように手順が決まっています。ただ実際には相手も言うことを聞かないので、強制着陸まではいかないのが実際のところです。

後、戦闘機が千歳からどれくらいで来られるかですが、速く来ようと思えば来れるのですが、いろいろな制約があります。大体稚内と千歳が500kmぐらいあるとしたら、民間機だと離陸や着陸の時間も含めて1時間ぐらいで飛んで来ます。普通に飛行機が飛ぶという時は一番燃費がいいスピードで飛ぶので、それが大体時速で言えば900kmくらい、稚内から千歳が500kmとしたら通常に飛ばせば40分か50分掛かると思います。マッハ1が大体時速1,200kmですが、マッハ1や2で飛ばせばそれだけ速く来られますが、音の壁を破ることになり、すごい衝撃波が発生します。地上でもガラスが割れたり、昔あったのは馬や牛が驚いたりということがあるので、基本的にはなるべく控えるようにしています。どうしても間に合わない場合は、あらかじめスクランブルを行い、稚内上空で待機するという手法もあります。距離とスピードで基本的には決まってしまうという状況です。

質問者2：先程スクランブルの相手方の国の表を拝見しました。その他という国があ

りましたが、どこなのか教えていただけますでしょうか。

藤原司令：その他とありますが、スクランブルした時に民間航空機の場合もあります。先程言いましたように、日本に入ってくる時はポイントが決まっています、何時何分にこのポイントに入るといふ飛行計画があらかじめ流れてくるのでそれと照合しますが、その情報が入ってこない場合があります。飛行計画の情報は国土交通省と相手側の同じような組織がやってくれています。その情報を航空自衛隊はもらいますが、樺太方面から入る時はユジノサハリンスクにそういう組織があって、そこから札幌の国交省の方に情報を流すこととなります。その情報が遅れた場合は許可されていないのでスクランブルするしかなく、そういうのも含まれています。後は米軍機です。それから、レーダーに映って飛行機か何なのか分からないもの。私が勤務した時は、渡り鳥も大群で飛ぶとレーダーに映るんです。空の上は波と同じで風が流れていますから結構速いスピードで動く場合は、ヘリコプターかもしれない、鳥かもしれない、分からないということでスクランブルをして行ったら、飛行機のレーダーに映らないけどパイロットが見たらいっぱい鳥が飛んでいるというのも過去にありました。そういうのも含めてその他ということで、必ずしも国だけではないのがここに入っています。その他には最近では無人偵察機ですね。そういうのも、国籍が分からないのはその他です。

質問者3：先日の災害救助でヘリコプターが人を吊っておりましたが、吊る方も大変だと思えますが、ヘリコプターは結構怖いものなんでしょうか。

藤原司令：やはり怖いと思いますし、危険だと思います。全く安全かといったらああいう状況です。荷重的には大丈夫ですが、波や障害物がありますから危険をどうクリアするかは判断力が求められます。この間の茨城の災害派遣で家からピックアップする時の映像がよくテレビで流れていましたけれども、やはりヘリコプターとしては突起物が一番怖いんです。ローターに突起物が当たるとヘリ自体が落ちてしまうので、風向きや進入方向を考えないといけません。降りていく人間は怖いかかそういう状況ではなく、助けなければいけないという使命感の方が強いと思います。そのために厳しい訓練をしています。空自の場合はメディックというのですけれども、かなり厳しい訓練です。最初に試験を受けますが、まず試験に合格するのが難しい。また、合格しても1年間訓練があり、その途中で脱落していくということもあるので、なかなか養成が難しい状況です。ただ、それを通った人間はそういうのを克服している人間なので、怖いというよりも人をどうにかして助けなければということ優先しています。

以上